

「錦城山プロジェクト」の取り組み

普段の授業とはひと味違う学びを模索するなか、テーマを「錦城山」に求め、その取り組みを地域に発信し、成果を自ら発表する。それを私たち一人ひとりの課題とする。私たちが目指したものは、生徒と私たち自身の変革だった。

石川県立加賀聖城高等学校
教諭 西谷重夫

○はじめに

遅刻、欠席、成績不振、生徒に苦言を呈する職員室風景。携帯、漫画、私語、授業者を悩ませる日々の授業。生活体験発表会などの消え入るような声の自己表現。生徒たちの現状は私たちの目標や願いとはいささか遠いものだった。

私たちは生徒と教師が対峙するのではなく、共に学ぶなかで互いの理解を深め、学ぶ楽しみ、充実感を共有する、高見に立った指導ではなく、共に学ぶことで生徒たちが、賢くたくましくなることを目指した。それは私たちにも変革を迫るものだった。

総合的な学習の時間の計画づくりを進めるなか、平成23年8月、「いしかわ版里山づくりISO」の認証を受け、9月、「里山里海スーパースクール」の認定を得て、平成24年度の総合的な学習の時間の取り組みとして「錦城山プロジェクト」の構想がスタートした。

○郷土に学び・郷土を誇り・郷土に生きる

学校から間近に仰ぎ見る錦城山は現在も発掘が進む歴史的価値が高い城址公園である。遊歩道が整備され、市民の憩いの場ともなっている。また、錦城山が自然林を形成していることも貴重な財産である。大聖寺の街が一望できるこの山は、この地の歴史や自然の豊かさで「宝の山」ともいえる山である。この山にこだわり、錦城山プロジェクトは生徒・職員を4つのグループに分けて取り組んだ。

①錦城山の植生

250年もの間「お止め山」といわれる入山禁止令によって豊かな生態系が守られている。キンランはじめ国の絶滅危惧種にも登録される稀少植物の宝庫となっている。これらの保護や錦城山の植生を学ぶ取り組みは格好のテーマとなった。

②錦城山のサギ

錦城山の北西斜面はサギ山といわれるサギのコロニーとなっている。3月初旬に東南アジアから飛来し7月下旬に帰っていくサギ、留鳥として1年中ここにとどまるサギなど、こもごもコロニーを形成する。このサギの種類や生態は興味深い学びの対象となる。

③錦城山の歴史

この地の歴史は錦城山を中心として南北朝時代に始まる。今も発掘が進む大聖寺城、この地に繰り広げられた数々のいくさ、教科書でしか見ることのなかった織田信長や柴田勝家の軍勢がこの校舎の近くを駆け抜けていたのだ。そういえば弓町、鉄砲町、鍛冶町、鷹匠町、関町、…。自分たちが住む町の名前に歴史の刻印を見て取ることができる。学習を進めていくうち、この歴史に強い興味を示す生徒も現れた。

④錦城山の文化

加賀市大聖寺は江戸時代の地図が今も使えるという城下町。町に伝わる伝統料理、大茶盛な

どの伝統文化、市立図書館には大聖寺に伝わる伝説と民話などテーマに事欠くことはない。

取り組みを進めていくうち、210年も前に第8代大聖寺藩主前田利考（まえだとしやす）によって編まれた「聖城怪談録」に出会った。この本に登場する大聖寺の街並みは今の街並みの描写かと思うほど重なり、臨場感をもって読むものに迫る。こうして錦城山はすっかり学校のなかで根付きはじめた。私たちの願いは、単に知識としてではなく日々の生活のなかに、郷土の歴史や文化、豊かな自然が染み入ることだった。

○地域の人材に頼る・・・・

取り組みには外部の人材は欠かせない。地域の研究者はじめ多くの人の協力を仰いだ。またその講演会には地域の人への参加を働きかけた。



講演はおもしろおかしい内容ではなかった。むしろ難解だった。それでもひとりまたひとりと耳を傾ける生徒が出始めた。なかにはメモをとる生徒も現れた。地域の人たちの参加も多いときには10名を超えるようになった。





第6回 講演会

錦城山の歴史 ～錦城山の歴史について学ぼう～

1 日 時 6月21日(木)
夕方6時00分～7時00分

2 場 所 本校「聖城ふれあいホール」
(玄関入ってすぐ右奥)

3 講 師 山口 隆治 氏
(文学博士 加賀市江沼地方史研究会員)
・・・元加賀聖城高校の先生です

【地域の人へ参加を呼びかけたポスター】



来校された講師も加賀市文化課課長、加賀市江沼地方史研究会の会員、鴨池レンジャー、元理科教師の植物研究者など多彩な顔ぶれだった。生徒はそれぞれの道の専門家、いわば本物に触れる体験を重ねたのだ。



○学校から飛び出した取り組みを

生徒たちは何回となく山に出かけた。そのたびに新しい発見があった。絶滅危惧種の開花を守ろうと柵を作り、5月、美しいキンランの花を見ることができた。観察を続けているうち、その花が誰かに持ち去られていることも目の当たりにした。自然保護の難しさを痛感した。

何回も学校で研究者から話を聞いた。難解な内容にも生徒は食いついてくようになった。やがて内容に興味を抱く生徒が現れた。ときには学校を飛び出し町の古老を訪ね郷土の歴史を聞いた。古くから語り継がれるこの町の歴史。これも貴重な体験だった。



市の図書館にも通った。はじめて見る資料。これまで興味もなかった「加賀の文化」、「大聖寺の伝説と民話」、「聖城怪談録」、・・・。多くの資料が、これを作った人たちの大変な労作によるものであることも理解できた。



サギの観察はその数を数え、ヒナの様子を調べ、サギの種類を調べた。ダイサギ、チュウダイサギ、コサギ。これら白いサギだが、「シラサギ」というサギはいないこともはじめて知った。渡りは同じ種でするのに、コロニーでは幾種類ものサギが混在していることも不思議だった。ヒナを育てる親鳥の様子も観察できた。



○取り組みを発信する

この取り組みは、学校の外に向けて発信することを当初から目的の一つと定めていた。本校への理解を求めるとともに、私たちの取り組みに対する外部からの感想や評価を期待した。取り組みをより確かなものにするために必要なことだと考えたからだ。取り組みの様子をパネルにし、様々な機会にそれを展示了した。そこでは必ずアンケート用紙を備え外部の声に耳をそばだてた。



用紙を備え外部の声に耳をそばだてた。

8月地場産業振興センターで行われた「いしかわの里山里海展」を皮切りに、加賀市立図書館での展示、文教会館での教育



資料ロビー展、県庁でのエコ贈呈式での展示、北國銀行での展示など様々な場面での展示を行った。またHPでの発信も「錦城山プロジェクト」、「今日の錦城山」、「大聖寺の街を歩く」などの頁を設けその都度担当者により更新された。



○こうしてたどりついた発表会

これまで「総合的な学習の時間」の発表は全員で、ひとりひとりが発表するものだった。「人前で自己を語る」。聖城高校で大切にされてきたことだ。生徒が社会進出するためにどうしても必要な力だと考えるからだ。しかしそれは容易なことではなく一部の生徒にとっては高いハードルだった。そのため発表態度も内容は満足できないものが多くたった。とりわけ中学校時代に不登校経験のある生徒にとっては、大きな負担となっていた。この取り組みでは、各コース内でさらに数人のグループに分け発表者やそれを支える係りを分担し、誰もが発表に携わり、その内容も外部の人の評価に耐えうるものを目指した。自分の取り組みを見知らぬ人の前でも発表するという体験は今後のステップアップにつながると考えている



発表会の案内はこれまでの講師陣、地域の人々、市内の中学校にも届け、生徒の発表会への参加をお願いした。こうして発表会は行われた。

ある発表者は模造紙に地図や資料を描き、また別の発表者はプロジェクターを使い、これまでの取り組みを発表した。それぞれの発表は確かにこれまでの消え入るような声ではなく、しっかりした発表を、という初期の目標に達したものだった。参加された人たちからも好評をいただいた。



○取り組みから生み出されたもの

錦城山プロジェクトはこれまでの取り組みを見直すことも一つの目的だった。定時制高校はおしなべて、憧れの学校ではない、ここを目指して頑張ってくる学校ではない。学習履歴や入学動機はさまざまである。基礎学力の不足であったり、長い不登校であったり、これら生徒の多様性を豊かさに転化することがこの取り組みである。従来の授業では発揮できなかつた生徒の持ち味が突然現れる、という可能性を秘めた取り組みである。普段ほとんど口をきかない生徒がモミの木の年輪調べのときに生き生きと取り組んでいた姿は印象的だった。難解な講演会で熱心に耳を傾ける姿に驚きもした。市の図書館での調べ学習での熱心振りは誇らしくさえあった。発表会における発表ぶりも私たちの予想を上回る出来だった。

錦城山をテーマに取り組んだ総合的な学習の時間だったが、一方その成果を各教科に取り入れる工夫も試みた。地歴「郷土史」(学校設定科目)では戦国時代の地元の歴史に触れる。理科「地球環境」(学校設定科目)では錦城山のサギ山や稀少生物の生態系に触れ、生物多様性について取り上げる。「体育」の授業では、錦城山登山の実施、家庭「被服製作」は、錦城山の樹木の枝や実を利用した草木染めに挑戦。「情報 A」では錦城山紹介の Web ページの作成。商業「文書デザイン」では、錦城山プロジェクトのポスター制作など。「英語 I」では、歴史グループの発表を英文に翻訳し、教材とする授業を行った。(下の資料「Do You Know . . . 」) この授業は要請訪問で実施され好評を得た。

いずれも生徒にとって自分たちの取り組んだ内容をもとにしたものであり、リアリティの

ある教材による授業の実現だった。

Do You Know Where Daisho-ji Temple Was?

PART 1

Hello, everyone! I am a student of Kagaseijo High School.

First, I'd like to introduce my school. It is in Daisho-ji-Baba-machi, and the nearest station is Daisho-ji Station.



My school "Kagaseijo" and Mt. Kinjozan

You know we have several names beginning with "Daisho-ji" here. "How many towns beginning with 'Daisho-ji' are there in Kaga City?", I wondered.

So, I got the list of the towns and tried counting the number of them. To my surprise, there are as many as 65 towns!

○最後に

終業式などにおいて学校長の講話に生徒から拍手が起ることが何度かあった。かつてなかった現象である。学校に不信感を抱いていれば決して見られない光景である。本校に長く努めるものには隔世の感が湧く。数年前、本校で職員による不正事件が起き、荒れすさんだ空気が長く立ち込めた日々を知るからである。新聞でも報道された忌まわしい事件だった。生徒と職員とのあいだの親密感や信頼感が根こそぎ破壊され、私たちの呼びかけに生徒の反応は冷たく、すさんだ空気が学校に満ち溢れた日々だった。この状況をいかにして乗り越えたか、事件を教訓とすることは大切なことだ。事件を目の当たりにしたものの責任もある。月日が経ち、生徒や職員が入れ替わりいつしか忘れ去られる。と、これでは事件から教訓を得ることにはならない。

生徒を理解する。その境遇に共感する。毎月行われる「支援連絡会」における情報交換で生徒ひとりひとりの情報を共有し理解を深める。卒業式や文化祭などの準備作業を、職員も生徒とともにを行う。指導・監視ではなく共に参加する。こうした姿勢は遅々としてではあるが、必

ず生徒に伝わる。

私たちの指導を容易に受け入れない生徒の存在は今もある。未熟な生徒はときに傍若無人ともいえる振る舞いをする。強い指導も必要だが、その未熟な生徒からも私たちは学びうるという謙虚な姿勢が、失われた信頼を少しづつ回復させたのだと思う。

錦城山プロジェクトは教科指導と違い、教員にとっても専門外のことである。そのため共に学ぶという姿勢が色濃く現れる。図書館での調べ学習でも、生徒とともに私たち自身が学びの対象として資料を調べる。指導する・されるという関係ではない。この新しい学びのスタイルはこれまでとは異なるつながりを生み出した。発表会においても、生徒の発表の態度や工夫とともにその発表内容に、教員も強い関心を抱くのである。

遅刻、欠席、成績不振、授業態度が一変したわけではない。すべての生徒が生き生きと登校してくるわけではない。朝からの厳しい労働に疲れやストレスを抱え夕方学校に来るなどの生徒にも勤勉な態度が身に付いたわけではない。それでも日々の苦労に共感しようとする私たちの姿勢が揺らぐことはない。このことも取り組みの成果の一つといえるかもしれない。

担当者として取り組みを振り返り、初期の目標を一定程度達したという自負を持つことができた。工夫や改善の余地は多くあるが、それは今後の取り組みの楽しみでもある。生徒の発表を見ていて、私たち教員の発表がプログラムにあったなら、この取り組みの完成度はもっと向上するだろうと思った。

生徒の感想

◇錦城山プロジェクト歴史チームは、実際に錦城山にあつた城やその城主について調べました。錦城山に詳しい地元の方の話を聞いたり、図書館で郷土史について調べたりしました。調べていくなかで、大聖寺城主の人柄やその時代が今までに習った戦国時代とシンクロしていくのが、面白く分かりやすく学べました。発表では大聖寺城主の移り変わりを、そのとき同じくして日本では何が起こっていたのかを織り交ぜて発表しました。たくさんの登場人物をイラストで描いて発表したのが、聞いているみんなに分かりやすかったと思います。



◇私は植生グループとして取り組みましたが、植物が生い茂っている山の中であまり目に留めない足元には、稀少植物があるかも知れない。そう考えると保護柵は大事だと思うし、柵を作ることによって何気なく登った人にも錦城山の貴重さを知ってもらえる。錦城山プロジェクトに取り組むことになって何度も錦城山に登るうちに何気なく見ていたらどこにでもありそうな、何でもない木や草花が実は貴重だったり、そこにしかなかったり、それぞれに名前があるという当たり前だけど、今まで気づかなかったことに気づくことができました。

追記　錦城山プロジェクトを進める上で欠かせない存在だったのが古場田良次先生です。元小学校長。中学校で理科を習った職員もいます。植物研究者として広く知られる先生です。錦城山の稀少植物の保護に熱心に取り組まれていました。数年前、学校の前を流れる熊坂川の除草作業で誤って稀少植物のフジバカマを刈ってしまったことで、私たちは強い叱責を受けました。このことが先生との関わりの始まりでした。以来錦城山の植生のことでは何度も教えをいただきました。80を超える歳にもかかわらず、私たちと何度も錦城山に登り植物の知識だけでなく、自然と関わる、自然を守る心を教えていただきました。病のため逝かれた先生の教えとご恩はいつまでも加賀聖城高等学校に刻まれます。ご冥福をお祈りいたします。